



パック連通信

事務局：山梨県大月市御太刀 1-2-10

No.120 2022年3月10日発行
全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

TEL. 0554-22-3611

学乳パックリサイクル啓発パンフレット

「学校給食用牛乳パックリサイクルのすすめ」を作成

今年度の全国パック連とパックマーク促進協の啓発事業として、学乳パックリサイクルを呼びかけるパンフレットを再発行いたしました。

乳業者の学乳パック引き取り停止に伴い、各地で混乱が起き、結局廃棄を選択した自治体が少なくありません。しかし、資源を燃やすよりリサイクルした方が良いと考える自治体や、学校現場の先生方が、学乳パックリサイクルにしっかり舵を切っておられることも事実です。SDGs の観点から、教育現場でこそ牛乳パックのリサイクルを進めていただきたく、ご活用のご協力をお願いいたします。

一昨年度、東京都教育庁地域教育支援部を伺った際に、学乳パックリサイクルを理解してもらうための手引きがあると、説明しやすいとのアドバイスをいただき、「学校給食用牛乳パックリサイクル手引書」を作成しましたが、このたびタイトルやレイアウト、事例集欄を改訂し、用紙も牛乳パック再生紙を使用して再発行いたしました。

事例集では、西東京市教育委員会、練馬区教育委員会、天草市市民環境課の各ご担当者様に実施校をご紹介していただき、直近の事例を掲載することができました。

都内2校へは直に取材することが叶いましたが、天草市へはコロナ感染状況から伺うことができず、熊本県内の学乳パック（洗浄・乾燥・開いてあるもの）の受け入れを全面的に行っている(株)田中商店の田中社長に仲介していただき、天草市廃棄物対策係長様が代わって実施校へ取材に行ってくださいました。

取材にご協力いただいた各自治体のご担当者様、学校様、田中商店様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

各地で、学乳パック回収の相談を受けている回収事業者や福祉事業所から、すでに3000部以上の申し込みをいただいておりますが、ご希望数お送りできるよう部数を用意しておりますので、お気軽にご相談下さい。

1984年に市民運動として始まった牛乳パック再利用運動は、上質なパルプを使用している牛乳パックが、容器の役割を終えると捨てられてしまっているのを、「もったいない」「ものを大切にする大人の姿を子どもに示そう」と全国に広がっていきました。

この運動を担ってきた全国パック連は、単に牛乳パック回収活動で終わるのではなく、牛乳パックを暮らしのレンズととらえ、環境、リサイクル、教育、文化、福祉、人と人との絆など、社会のいろいろな問題に気づき改善に向け足元から行動しようと、活動を続けてまいりました。まさに現在のSDGsにつながる考え方が基本となっていますが、学乳パックリサイクルも、SDGsのゴール達成の一翼を担うことを子どもたちに伝えていきたいと考えています。



紙パックの回収率が、さらに低下しました

全国牛乳容器環境協議会の調査によると、産業損紙、古紙を含む紙パックのリサイクル率は38.8%前年から2.6%減。家庭などから排出される使用済み紙パックなどの回収率は29.7%で、同じく前年から2.6%減で、回収率ピーク時から比べこのあまりの下げ幅に日経新聞も記事として取り上げた状況です。

日 本 経 済 新 聞

2022年(令和4年)1月22日(土曜日)

紙パック回収率、低下続く

牛乳などの使用済み紙パックの回収率が鈍化している。プラスチック製キャップ付きなど容器が多様化し、リサイクルに回らなくなっている。新型コロナウイルス禍の影響で回収が停止した影響も追い打ちをかけた。全国牛乳容器環境協議会(容環協、東京・千代田)によると、使用済み紙パックの2020年度の回収率は29.7%だった。16年度は35%台あった回収率の低下傾向は鮮明だ。

家庭で紙パックを10本消費した場合、3本しかリサイクルされてない。5年ほど前からキャップ付きが登場するなど容器が多様化。キャップ付きは鮮度が保てる利点がある。自治体にもよる

20年度30%割れ「プラ製注ぎ口駄目」誤解

が、キャップをはずしプラスチック製注ぎ口をつけたまま紙パックとしてリサイクルできる。ただ「リサイクルできない」という思い込みなどから、回収に回らなくなっている(製紙会社)。

20年度はコロナ禍で密回避などから大型スーパーがリサイクルボックスの使用を中止した事例も影響し、回収停滞に拍車がかかった。

紙パックに使われる原料は繊維が太くて長い良質な針葉樹パルプ。1本の紙パック6枚でトイレトーパー1個ができてあがる。脱プラスチックの流れの中で紙の容器に注目が集まっている中、業界関係者は「紙のリサイクルが停滞してはならない」と強調する。

原因は本当にプラキャップやコロナだけでしょうか？

2000年に完全施行となった容り法の成立に至るまで、牛乳パックを位置付けるか否か、国行政、中身及び紙パック製造メーカー、受入れメーカーらと議論を重ねていて、結果牛乳パックリサイクル運動の波及効果が認められ、容り法の分別品目として定められました。

さらに、有償で取引されている現状も考慮し、再商品化義務からも外されました。

当時の厚生省環境整備課の担当室長の方が、神奈川パック連主催のシンポジウムで、「牛乳パックが容り法

の分別品目として定められたのは、まさに皆さんの市民運動の力によるものです。」と、運動の評価をされたことは、今でも鮮明に記憶しています。

その礎が築かれていたからこそ、全国牛乳容器環境協議会(以下容環協)に参画している中身・紙容器メーカーは、再商品化義務の免除という恩恵を受けています。2000年以降容環協との連携が再開されたのも、ステークホルダーの一角である市民と協力していくことが重要と、私たちパック連の提案に耳を傾けてきた経緯があります。

昨年容環協の当会への傍若無人な対応から連携を解消といたしました。さらに回収率の低下という調査結果や、2022年版容環協の年次報告の一部に相変わらずの横暴な記述があるのを見て、3月1日リモートによる容環協主催の「紙パックリサイクル促進意見交換会」に出席することにしました。

独りよがりな進行で終わった紙パックリサイクル促進意見交換会

ZOOMによるリモート開催とはいえ、また60人余りの参加者があるとはいえ、口火を切る司会が顔だししないまま進んでいるためか、参加者のほとんどは終始ビデオを停止したまま、互いに顔を確認することなく会は進んでいきました。また、例年の容環協活動報告を、後の意見交換に時間を集中するため、手短かに報告としながらも、いざ意見交換に入ると、他団体実施の消費者意識調査をもとに「市民の意識が低下傾向」を長々と評論家のごとく説明を始めました。さらにまだ実現もしていないWEB回収拠点マップ作りの構想の説明や、不特定多数相手に使う手法のWEB投票の形態をとり、都合のいい選択肢しか用意していないなど、参加者に対し非常に失礼な進行で、意見も言いにくい状況でした。その中で、受入れ製紙メーカーからパルプ製品の購買が伸びていて、再生品が売れていない状況や、古紙問屋からは学乳パックの回収量の激減への指摘、容環協OBからも年次報告の記述への厳しい指摘がありました。

全国パック連として、2点について意見陳述

一つは、年次報告書 2P にプラン 2020 の課題を 1～4 まで掲げていますが、1.市民に向けた課題①の冒頭に記述されている「紙パックが資源であるとの意識が低下傾向です」について、スーパーの店頭回収ボックスをチェックし写真におさめ、それを提示しながら、意見を述べました。



左写真は、イオン大月店のリサイクルボックスの様子です。

3か所ある入り口の一つ、右脇外の一角に設置されていますが、証明写真ボックスも置かれている、風雨をしのげる屋根のあるスペースです。

牛乳パックの出し方についても、一目でわかるようにイラストを表示していますが、さらに詳細な説明のシールも貼られていました。

6年ほど前、当時の容環協の加藤常務や後藤事務局長と、イオン本社環境・社会貢献室を訪問した際に、明確に開き方がわかるようボックスに貼るシールの必要性について意見交換をさせていただきました。その後当会で企画・製作し、容環協に400枚ほどおさめましたが、イオンさんも独自で作成して、このように貼って下さっていることがわかりました。中をのぞくと、きれいに切り開かれたパックがボックスいっぱいに入っていました。

一方下の写真は、近年新たに开店したベシア都留店のリサイクルボックスです。ホームセンターも併設されているので、店舗面積は大変広いのですが、リサイクルボックスは外に置かれていて、雨ざらしの状態でした。そのため、排出ルールを説明するシールの一部がはがれ、所々イラストが消えてしまっていました。

中をのぞくと、開いてないパックやアルミ付きのパックを発見。

この2点の写真を提示し、回収する側のはたらきかけ方の熱量の違いをこの回収ボックスは物語っています、市民の意識が低下しているなど、上から目線で分析していますが、市民に伝えようとする業界の努力不足により回収率も下がっているのではないかと述べさせていただきました。

二つ目は、左表（容環協調査）のとおり学乳パックリサイクル率の低下についてです。回収率の激減は、乳業者の引き取り停止によるものですが、確かに洗浄されず、中身の入ったごみの状態の学乳パックの引き取りは、当然廃掃法にも抵触し、停止したことは理解できますが、なぜ撤退する際に学校や関係機関にリサイクルの道筋をつけるお願いなり、努力をしなかったのかを指摘しました。

東京都では教育庁のご理解をいただき、都下市町村にリサイクルの方向での検討をはたらきかけていただきました。実施校の視察をしたところ、先生方の熱心な指導のおかげで問題なくリサイクルが行われていましたが、そうした学校現場のご協力にまず感謝すべきです、と述べさせていただきました。

この指摘をしようと思ったのは、容環協の年次報告書に「単発の出前授業など効果として認められないものについては中止していく方向とした」という記述があったからです。2007年から容環協と連携で実施してきた出前授業のそもそもの目的は、リサイクルに取り組んでいる学校への感謝の表明と、環境教育の教材研究が大変な先生方への支援でした。

日々行っている学乳パックのリサイクルが、社会でどのように役立っているか、対面しながらその意義を伝えることで、子どもたちの心にもしっかりと刻まれていました。このような独善的な記述の年報を今まで見たことがなく、これを世に出すことを容認している容環協自身の体制を大変問題だと感じています。

近年の学乳パック供給量、回収量・率の推移

年	供給量	回収量	回収率
2016	11,600t	8,700t	75%
2017	11,800t	8,700t	73.72%
2018	12,100t	8,600t	71%
2019	11,600t	7,600t	65.51%
2020	11,900t	5,700t	47.89%

容環協プラン 2020 に対し掲げている課題が他人事

前述で、年報に記述されているプラン 2020 の課題 1 の市民に向けた課題に触れましたが、その他も 2 については、地域による回収インフラ、輸送が課題、3 は牛乳パック等のラミネートや注ぎ口などのプラスチックの処理コストの高騰の処理問題、4 は再生品の使用促進に関する課題と、中身・容器の生産側自身の課題には全く触れていません。

回収率の低下の要因が他人事であるかのような総括で、これまでの事業をゼロにして新たにプラン 2025 を作成しても、結果がついていくのか非常に疑問です。

容環協 OB の方から年報を見た感想も含め、これまで我々が取り組んできたことを何もしていないかのように過去を削除している、パック連が企画提案してきた活動を、単に焼き直ししただけ、と発言があり、一緒に汗を流し活動してきた方々の言葉に救われる思いでした。個別にもこちらの方へ、容環協の方向性が良く見えない、回収率の低下は市民意識の低下ではなく、生産側、回収する側、受け入れる側がそれぞれ役割を果たしていない結果では、という声が届いています。

また、指導監督省の容環協に向けての姿勢が甘いことも、業界の緊張感を失わせています。

容リ法成立前には、当時の厚生省・農林水産省・経済企画庁・環境庁の各担当官が、市民による牛乳パック再利用運動に対し「自主的な運動を大切にする形で対処していきたい」と語る一方で、再商品化義務を免れた業界の努力が十分でないことを厳しい口調で指摘していました。聞いている市民の私たちも身が引き締まりましたが、今はそうした場面を見ることがありません。

来年度、パック連は学乳パックや、再生品促進の課題に向けて、関係者との対面あるいはリモートで、きちんと忌憚のない意見を交わせる場を作っていきます。

トイレットペーパーと向き合う展に行ってきました

2 月 25 日から 3 月 4 日までの 10 日間にわたり、渋谷フクラス 1F の観光案内所スペース shibuya-sun において開催の「トイレットペーパーと向き合う展」に行ってきました。コアレックスと shibuya-sun のジョイントによる催しで、紙パックを持参したり、再生紙あてっこクイズに参加するとトイレットペーパーがプレゼントされる企画もあり、休日には 70 人もの入場があったそうです。牛乳パックも沢山寄せられ、バックヤードに一杯たまっているとのことでした。展示品であるトイレットペーパーのほとんどに牛乳パック再利用マークの表示があり、こうした展示会を通して一般消費者の牛乳パック再生品への理解、購買につながることを願っています。



◎牛乳パックリサイクル・牛乳パック再利用マークについてのお問い合わせは

全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 / 牛乳パック再利用マーク普及促進協議会

TEL.0554-22-3611

FAX.0554-56-9216

E-mail info@packren.org

ホームページ <http://www.packren.org>

〒401-0012 山梨県大月市御太刀 1-2-10